



東北サイクリング紀行（2）

8月18日

夜半、雨が降ったようだったが、朝には上がった。潮騒で早朝に目が覚めたぼくは、テントから出て顔を洗った。余分にビールを飲んだので二日酔い気味だ。水をたくさん飲んで、さらに昨夜飲み残した気の抜けたビールを向かい酒に飲んだ。そしてザックからポケット・ワープロを取り出して海がよく見えるベンチまで歩き、そこにすわって昨日のことなどをメモした。しかしたいして書くことはないようだったので十行足らずで終えた。

怒濤を聞きながら崖の上の小道を散策する。地図を持たないぼくは、今自分たちが下北半島のどの辺りにいるのか定かではない。このような呑気さはぼくの人生においても見ることができる。自分は40代半ばにさしかかろうとしているが、今が盛りの熟年パワーファイターなのか、まだよくわかってない若僧なのか、あるいはもうそろそろ老後の設計を真剣に考えるべき初老なのか、よくわからない。だからこの歳になってもサイクリング・ツアーなどに出てくるのだろう。今自分が人生のどの辺りにいるのか定かではない。かなり来たことはよくわかるが、まだ先がどのくらいあるのかわからない。まだまだ急坂のダート道を選んで、汗だくになりながら自らを鞭打って登らねばならないのか、もうこの辺でなだらかな下りの遊歩道に入って適度にブレーキをかけながらのんびりと下っていけばいいのか。

すると大高君がテントから出てきて「きょうは海峡ラインを走ります、楽じゃありません、山間部に入ってアップダウンが続き、ダートもたくさんあるでしょう、がんばりましょう」と言う。ぼくはできるだけ平静をよそおって「オーケー」と言う。

一時間後にはぼくらは海峡ラインを登っていた。中国画の中に出てくる古の人物像を思わせる奇岩の並ぶ仏ヶ浦を見下ろしながら崖の上に造られた道に行く。やがて海を離れ山間に入る。きらめく海がたまに山の切れ目から見えると美しい。日差しが強く暑い、高地のため空気はひんやりして風は気持ちいい。途中牧草地があり、牛が放牧されていた。ダートが多いラインで車が通るとほこりが舞い上がりづらい。舗装工事中の所がいくつもあった。

見晴らしのいい道端でパンと魚の缶詰とソーセージの昼食をとる。ぼくは食パンをバーナーでトーストしてイチゴ・ジャムをたっぷりつける。大高君はいつものように食パンにマヨネーズをべったり塗ってほおぼる。この夜々の美食家も昼にはトライアスロンの選手がレース中にとるような簡便な食事を早々に済ませる。しかし彼女から持ってゆくようにともらったビタミン剤をいつも飲んで栄養バランスにぬかりない。そして食後には愛用のトウモロコシのパイプに火をつける。その時ぼくは岩などにもたれて読書をする。今回は読みやすい英語で書かれた Roger Lancelyn Green の「トロイ物語」から20数枚を切り取って持ってきた。読み終えた頁葉を一枚ずつ捨て

ていく。毎朝の満員電車で本を開くスペースにも窮するサラリーマンの得た知恵だ。シェフはパイプを吸い終わると、こんどはその掃除を始める。そうしている間にぼくは二三枚は読み捨てることができる。

海峡ラインはやがて脇野沢川と合流し下りになる。脇野沢村に入ると「世界のサル生息北限地」という標識があり、小さな公園があった。中には猿の山があり、外の山へいつでも戻れるよう通路のようなものもあった。ぼくは飲み干して空になったコーラの中瓶を吹き鳴らしてサルたちの注意を引こうとしたが、サルたちには無視され、手すりにもたれてサルを観察していた大高君の注意を引いただけだった。

この地が世界のサルの生息北限であるなら、サルたちはここまでは自力で北上してきたというわけだ。しかしここから先はどうにも北にゆけそうになく自分たちの限界を知ってとどまった。同じ霊長類である人間にとってもこの辺から北はもともとは住むべからざる地であったのかも知れない。ここから北は熊や鹿、狐などのより寒さに耐えうる動物たちだけに与えられた聖域だったのかもしれない。しかし火を得た人間は容赦なく北上を続け、ついに地上から生息北限をぬぐい去って北でも支配者として君臨した。だがサルの生息北限がいつもぼくら霊長類に、ここから北はまちがいなく他の動物の固有の北方領土であることを印し続ける。

脇野沢港に着いたのは4時頃だったろうか。もう青森に行く最終フェリーは出てしまっていたので、ぼくらはとなりの九艘泊まで行ってキャンプすることにした。九艘泊から先は道がなくなる。そこまでの海岸道路は海の景色が面白い。牛ノ首岬、鯛島と、見る角度によりさまざまのものを連想させる奇岩が海の中から突出している。イカを干している漁婦たちがいたのでシェフが自転車を止めて話しかけ、「一匹なんぼで売ってくれますか」と問うと、大きいのをひとつただでくれた。九艘泊に近づくにつれ逆風が強くなりぼくらを苦しめる。最後の岬の曲がりでは自転車が停止しそうになってぼくは立ちこぎをした。

九艘泊の唯一の食料品店に入って食購したが、魚はなく、けっきょく店の若奥さんの好意で干魚を一束もらった。それは売り物でなかったのでサービスだった。九艘泊で車道は終わり、あとは岸壁の下を歩道が、それもところどころ海水によって洗われていてかろうじてマウンテン・バイクで行けるような舗装された細道が続く。この道の終わるところに小さな入江があり、そこに村営のキャンプ場がある。バンガローもあった。ぼくらはここにテントを張った。まだ5時になっていない。ぼくは、度付き水中眼鏡とスウィミングパンツを持ってきていたので泳ぐことにした。しかし冷夏のため水は冷たく早々に切り上げた。水道で頭と体を洗ったあと、こんどは展望所があるらしかったのでひとりで岬を登り、木造の展望台に上がった。海が様々の色をしてきらめいている。沈みゆく真紅の太陽とピンクの雲と青い空気と緑の島々が映り、無数の波に断たれてドットに変えられ混ざり合いゴッホの絵のような海を展開していた。

ぼくらがテントを張ったそばにすでに一人用のテントが張られてあり、ぼくらが洗濯をしていると、そのテントから若者が出てきて挨拶をした。話によると室蘭工大の三年生で、夏休みを前に早々に留年が決まってしまったのでもう今年度は学校をずっと休み、オートバイでひとり旅に出ることにしたという。できれば九州まで脚を延ばしたい、しかしお金はたいしてないのでアルバイトをせねばならないという。できるだけ食事は質素にするが、好きな酒だけは毎晩欠かせないのだという。そしてこれから脇野沢村へ一走りしてウィスキーを買いにゆくが、何かついでに買ってきて欲しいものはないかと問うた。ぼくらは酒のつまみを頼んだ。そしてお礼に彼を夕食に招待した。

シェフとぼくは山の枯れ木や浜に打ち上げられた流木などを集めて饗宴の準備をした。まだ日の暮れないうちに起こされたキャンプファイヤーが音を立てて空気をむさぼり始める。米が炊けて、日が暮れかけても村に行った工大生は戻ってこなかった。ぼくらは待ちくたびれて漁婦にもらった干しイカを焼いて肴にして酒を飲んで待った。シェフの小型ラジオが青森からの放送をキャッチして鳴っている。他のいくつかのキャンパーグループが食事を始め賑やかな談笑が聞こえてくる。多くは釣りに来た人たちのようだ。やがて工大生が帰って来てぼくらも食事を始めた。火にさらされた干魚が香ばしい匂いを放ちながら身をよじらす。虫たちが飛んできて火に入る。

工大生は飯を頬張りながらシェフの人生観を感心しながら聞く。会社に入ればどこの学校を出たかなどはまったく問題でなくなり、実力で社員は評価される、とシェフは断言し、ぼくもそれに相づちを打った。それはシェフの自らの体験に基づく意見だ。彼には二流大学から一流会社に入り、そこで超一流の女性を射止めたという自信があった。工大生は勧められてすまなさそうにご飯のお代わりを盛りながら、「留年などしたら就職は難しいでしょうか」と問うた。ぼくは、その留年の間に何をするかによっては4年で卒業するよりはよりバネをきかせて社会に出ることができよう、と言った。これもぼくの体験に基づいている。ぼくは大学で2年留年しており、その間に英語で飯を食う自信をつけたことを話した。すると工大生は箸を止めて飯を食うのを止めしばらく何かを思案しているふうであった、が再び思いなおしたように箸を忙しく動かして食べ始めた。

食後に工大生のウィスキーがふるまわれ、ぼくらの心は高揚し北海道に飛び、彼の地の讚美がひとしきり語られる。あたりのいくつかの大型テントの中から老若男女の笑い声がたえず聞こえてくる。

キャンプ場の夜はいつまでも騒がしいようで、夜半にテントの中で目が覚めてみるといつしか空気の動く音しか聞こえない静寂が訪れている。ぼくは寝返りを打って美しきひとたちのこと思い巡らす。そしてそれもいつまでもきりがいいようで、いつしかまた眠りが訪れている。

8月19日

「'93 北海道を楽しく、安全に、快適に。Safety Summer Hokkaido HOKUREN」。翌朝工大生がぼくにくれた黄色い三角フラグにこうプリントされてあった。ぼくはこれを旅行が終わるまで自転車の後部に取り付けて走りつづけた。

のんびりしている工大生と別れてぼくらはキャンプ場をあとにし、釣りをする人のたまにいる崖下の歩道を、海にはまらないようおそるおそるペダルをこいで行った。九艘泊の漁港に行って青森に行く船の乗船券を買い、しばらく時間があつたので漁港を散歩してみた。イカや魚がたくさん水揚げされており、老漁婦がいくつかの容器に振り分けていた。すると一匹小型のサメがいて、これも食用になるらしかった。一尾だけギザメがいたが見向きもされていないようだったので、どうするのかと聞くと、そんなのは食べやせんで捨てるのだ、と言う。このカラフルな魚はぼくの好物で、少年のころ瀬戸内海で舟に乗って沢山釣ったことがあり、酢醤油で食べるときのそのあっさりした味はぼくの味覚をいつも快く刺激した。しかし北の地方ではあっさりした味は物足りないのだろう。ラーメンもそうだ。

船が来る時間が近づいたので船着場に自転車を移動した。魚はいるかと海面を見ていると海底が見え、白い自転車が一台横たわっている。だれかが船に自転車を乗せようとして失敗して落としてしまったものらしかった。ぼくらは大量の荷物を装着したマウンテンバイクを船に担ぎ込むので足場をしっかりと確保しながら乗り込まないと足を踏み外し自転車どころか人間も海の中にはまってしまう恐れがあつた。ぼくは不安になり少し荷を自転車から外して待機した。仏ヶ浦のほうからやってきた水中翼船は定刻に到着し、ぼくらは無事に自転車とともに乗り込んだ。船はテープ放送による観光ガイドもしながら脇野沢港に向かった。脇野沢港で多くの人が乗り込んできたが、盆が終わって青森に戻ってゆく人達だろう。見送りの中には孫たちとの別れを涙ぐんで惜しむ老人たちもいた。

水中翼船は陸奥湾を横切って青森に入港した。ぼくらは一般の乗客が降り終わるのを待って自転車を押して下船する。波止場に退役した青函連絡船が記念館として接岸されていた。シェフはぼくを青森の魚市場に案内してくれた。そこでスモモと盆用に作られた生菓子を買った。しかしスモモは道中で落としてしまい、生菓子はすぐにいたみはじめ、たくさん捨ててしまった。

青森の町の大通りを走ってぼくらは十和田湖方面に南下してゆく。ぼくはシェフを見失わないように追いかける。そのためには信号が赤に変わりかけても交差点を走り抜ける。そうしていると、横道に巨大なねぶたが運ばれているのをかいま見た。しかし大高君はどんどん先に進むのでゆっくり観察する余裕はなかった。逃がした魚は大きいと言うが、おそらくそれはぼくが生涯で見るとも大きいねぶたとなるであろう。

ぼくらはやがて国道103号線に入り、ひたすら南下する。大高君は南下すればするほど元気を

回復してくるようにピッチを上げた。まるで何か魔物にとりつかれているかのように彼はぼくのほうを振り向きもせず邁進した。その魔物は万有引力だ。ニュートンの法則が彼の魂をも質量の核としてとらえ容赦なくもう一つの核に加速度を与えながら近づけさせていたのだ。これら二つの核が激突し核融合したときなんと恐ろしいエネルギーが生じることだろうか。大高君、料理長よ、ここらでもうぼくらのふたり旅は終わっていたのだ。なぜなら君の心はもう東北にあらず、大阪の貴婦人のもとに行ってしまった。ぼくは君の脱け殻と旅を続けねばならなかった。そしてこの頃ぼくはようやく今度の旅の君の目的を悟ることができた。それはちょうど走り幅跳びや、走り高飛びの選手が助走をするためにいったんジャンプ位置より遠ざかるように、君も助走のためにわざと彼女から遠ざかったのだ。彼女という高いハードルをクリアしてそれを支配するためには十分な助走が必要だった。そして青森から助走を開始した君はもう一つのものしか見ていなかった。

このことを裏付ける現象が彼にはあった。ぼくのマウンテンバイクの後輪は国道103号線に入ってから、八甲田山に向かうときと、十和田湖を出て黒森山のあたりを走っているときと、一箇所また別の箇所と二度ほどパンクした。いずれもタイヤの耳が過重な負荷のために疲労してしまい、高圧チューブを封じ込めきれなくなり、ついにギブアップして、チューブを漏らし、黒いチューブは唇から膨らまされる風船ガムのようにみるみるうちに大きくなり、なすすべもなくそれを見つめているぼくの目の前で炸裂音を発してバーストしたのだ。しかし先に行っていたシェフは将棋の香車や桂馬の駒のように一度進んでしまうと戻ってこれないらしく、ぼくがずいぶん長くチューブ交換やらで停滞していても決して引き返して来ることはなかった。二度目のバーストの時は修理のめどがたらず自転車を押して進んだが、彼はあるところでじっとぼくの来るのを待っていた。しかし彼を無情と責めることはできない。いったん助走を始めた者が後ずさりをするだろうか。物体は万有引力に逆らって動くことができようか。否、彼はもうだれも引き戻すことができないくらい強く彼女に引かれてしまっていた。

青森を出てしばらく行くとゆるやかな登りが始まり、遠くに八甲田山が見える。萱野高原に到り、レストハウスのいくつかある萱野茶屋で自転車を降りた。多くの人が車を止めて食事や休憩をしていた。修学旅行の生徒たちも多かった。近くの林の木陰にてシートを敷きのんびりと昼食をした。食後の昼寝をしていると、大高君がレストハウスのみやげもの屋から記念のキーホルダーを買ってもどってきた。

彼のコレクションはかつては各地の記念バッジだった。北海道旅行や信州旅行のときは、彼は大量に集めた日本各地のバッジをよれよれになった古いサイドバックの表面いっぱいピン留めしていたので、ただでさえブルドッグの頬のようにくたびれて垂れていたサイドバックがずしりと重いたくさんの金属バッジにピン留めされてさらに痛々しかった。が、今はもうそのバッグはたくさんのバッジとともに彼の自転車から姿を消してしまった。信州の山道で革のストラップが切れて装着不能となってから彼は新しいサイドバッグを購入し、バッジはもう付けなくなった。そ

れから彼のコレクションもバッチからキーホルダーに変わったようだ。

103号線はこの辺りから八甲田山のすそ野を廻りながら延びる。この山は、新田次郎の「八甲田山 死の彷徨」を読んで以来、いつか登ってみたいと思っていた。しかし今回は登ることはしないですそ野を巡って十和田湖方面にそれることにする。

話も少しそれるが、ぼくは冬のアウトドアスポーツとして山スキーを好んでいる。山を重いスキーをはいて登ることを非合理的と考える人が多いようだが、実は雪山に登るのに山スキーはもっとも効果的履物である。スキーの裏にシール（語源はアザラシの毛皮）を貼るので、スキーは雪面を後ろ方向に滑りにくくされ、かなりの急斜面でも蛇行すれば容易に登れる。また広い面積を足場にすることになるので、ズボツと深雪に足を差し込むこともない。おまけに下りるときは、シールを外してすいすいと新雪をすべって下りてくることができる。しかしそれでも不信に思う人には「山スキーの本」（小泉共司・奥田博著）よりの以下の引用文を提示したい。

「明治三十五年に起きた、青森連隊の八甲田山雪中行軍の遭難は、実は山スキーと大いに関係がある。その大遭難を知ったノルウェー政府は日本政府へスキーを贈呈したという歴史的事実である。かのレルヒ少佐がスキー術を伝える二年前のことであった。」

実に八甲田山の悲劇は日本にスキーが伝わるのを早めたわけだ。川を渡るのに舟が考えだされたように、雪原を渡り歩くためにスキーが考案された。スキーは今はゲレンデを下るための履物として最もポピュラーであるが、その有用性は登るときにも大いに発揮される。そして悲劇の雪山八甲田は今では山スキーヤーたちの最高の溜まり場の一つである。

さて、やがてぼくらは、酸カ湯（すかゆ）温泉に到る。ここまでの登りの道中、「スカイ」温泉と聞き違えていたので、ずいぶん高い山の頂上にあって青空を眺めながら入る露天風呂のようなものだろうと想像していたが、風格のある古い木造の建物がぼくらを迎えた。広い駐車場には何台ものマイクロバス、自家用車、オートバイが止められており、そのはしっこには重装備の自転車が数台並んでいた。多彩な訪問者が中で入浴していることがわかる。入口から少し離れたところに大きな檻があり、セントバーナード犬が中で薄目を開けて横たわっていた。冬には活躍するのだろう。

ガイドブックによると、酸カ湯温泉は、八甲田大岳の西麓、標高925メートルにある古くからの湯治場であり、80坪の千人風呂は混浴だ。昭和29年に国民温泉第1号に指定された。

この温泉はその名の通り酸性が強いので口に含むと歯のエナメル質が溶けるのが判る。顔を洗うと目がしみる。混浴の千人風呂は女性更衣室に通ずる一部についたてが立てられ、美しきひとたちはたいていその向こう側で湯を浴み身体を湯に沈める。広さと悪戯心に誘われてついたてのこ

ちら側に姿をあらわすときにも、たいてい身体を隠すように肩まで浸かったまま湯殿のなかを移動してき、また中腰のままついたての向こうに消えてゆく。

美しきひとたちよ、あなたたちの悪戯は何と巧妙なことか。あなたたちがかいま見せたやさしい肩はぼくらがこの旅で見てきたどんな山の肩線よりも美しかった、そしてそれでいてぼくらが越えてきたどんな急峻な峠よりも近寄りがたいのだ。また、あなたたちがタオルを当てながらゆりとかしげる首はぼくらが見てきたどの木よりも愛らしくかしぎ、かつどの木よりも美しい根を延ばしている、そしてそれでいてぼくらはその木陰にすわることができないのだ。ああ、美しきひとたちよ、どうかひとつだけぼくの願いを聞き入れてほしい、どうかぼくがこの旅を無事終えたら、ぼくにその木陰で人生の長旅の疲れを癒す喜びを許してほしい。

103号線をさらに進んで行くといよいよ十和田八幡平国立公園に入り、道は奥入瀬川（おいらせがわ）に沿ってなだらかにうねりながら緩い勾配を登ってゆく。このゆるやかな川は十和田湖から流れ出るただ一つの水流で、湖畔の子ノ口から焼山までの14キロが奥入瀬溪流と呼ばれている。途中に大小さまざまな滝が見られ、「ともしらがノ滝」とか「白布ノ滝」とかそれぞれに魅力的な名前が付けられている。

大高君は小学生の修学旅行でここに来ており、そのとき溪流に沿う遊歩道の一部を女先生のうしろについて歩いたことを思い出した。歩きながら彼は先生の肩まで落ちる美しい髪が波打つのに見とれていた。「大高君、あなたはどの滝が一番気に入ったのかしら？」振り向いた先生が聞いた、そしてその時彼女の右耳の前を垂れる一束の髪がふわりと舞って彼の顔にさわった。それは滝壺に落ちる水が水面を乱すように彼の幼いハートにたちまち波紋を広げた。「白糸ノ滝が気に入ったす、さっきの」彼はとっさに答えた。が、その答えは彼を意気消沈させた。本当に彼が言いたかったことを言うには彼は幼すぎた。

「白糸ノ滝？」名前からして細そうな滝が連想された。「君が小学生のころのことならもう20年ちかくたっている。その滝はもう水を切らしてしまってなくなっているよ、きっと」とぼくは心配してやった。が、シェフは久しぶりに笑ってかつてのままという遊歩道をどんどん進んでいった。

白糸の滝、銚子大滝などを愛でながら進んでいると、いつしかぼくはこの長い緩い坂道にへばり始めていた。「十和田湖まであと何キロ」という標識だけがぼくの注意を引くようになる。ようやく子ノ口にたどり着いたらへとへとで、戸締りを始めたみやげもの屋の自動販売機で買った甘酒がとても美味しかった。しかし、みやげもの屋の主人に聞くと、スーパーマーケットなどはこの辺りにはなく、近い店に行くにも4キロくらい湖岸沿いを時計回りに走らねばならないという。

ぼくらは最後の力を振り絞ってこの4キロを走り、小さな酒屋にたどり着いた。ついにさすがのシェフも力尽きたらしく、もうここで夕食のための買い物をすることにした。気品のあるお嬢さんが店番をしており、きれいな手で食料を包んでくれた。ソムリエ（ワイン給仕責任者）の資格も持っているシェフは、「今夜はアップルワインにしましょう、5年ものです」と甘口を選んで持ってきた。ぼくはそのボトルを手に取り、輝き具合、色合い、音の具合などを調べ、うなずいて彼に戻した。するとソムリエは軽く会釈してそれを丁寧に受け取り、お嬢さんの美しい手の中に滑り込ませた。

店を出てキャンプサイトを決めるためにしばらく行っていると、ぽつぽつと雨が降りだした。次第に雨足が急になってきたので、湖沿いの道から少し離れたところにあった十和田中学校に向かった。その表玄関の軒下は十分に広く強い雨も凌げそうだった。校内に教員住宅があり、許可を取るために最初に呼び鈴を鳴らした家からは教頭が出てきた。彼はぼくらに好意的だったが、校長の許可が必要だと言って、ぼくらを隣の棟の校長の家に連れて行った。そして現れた校長は教頭よりも慎重だった。しかしぼくらの人柄を見抜いたのか、教頭としばらく相談をしたのち、快く許可をくれた。

校長の好意から玄関の蛍光灯を点けっぱなしにしてくれたのはいいが、ちょうど羽アリの群れの発生する日だったらしく、蛍光灯に大群が集まってきた。こちらで米を炊こうとバーナーを点火するとそれに寄ってきた羽アリの群れがぼくらの頭の上に雨のように降ってきた。アップルワインの入ったぼくの折り畳み式カップの中にも数匹が落ちた。多くは火に焼かれたがとどまるところなく降ってくるので、バーナーの位置をぼくらから遠ざけた。その後だれが飯の炊き具合を調べ、火から下ろすかについてもめた。そこに行くともまた羽アリの雨に見舞われるのだ。羽アリにとってはとんだ地獄であった。

しかし食事はいつものように豪華だった。シェフの味付けは超一流だ。彼のフィアンセが悔しがるのもなるほどと思えるほど料理の腕は確かだ。しかし残念なことに彼の料理のおいしさはぼくの語彙力ではここに具現することはできない。読者に彼の料理の片鱗も味わっていただけないのはまことに遺憾であるが、さりとてここに仮に具現できたとしても、それは読者を耐えられないくらい強い食欲に駆り立てるだけで、美しいひとの写真と同様百害あって一利なしであろう。

雨は翌朝まで降り続いた。

8月20日

東北旅行記のうちで最高傑作はもちろん奥の細道だ。芭蕉の簡潔さはいつもぼくを反省させる。ぼくはこの旅行記でも書きすぎたと反省している。説明的すぎて、読者の空想の余地をかなり奪ってしまったかもしれない。芭蕉の偉大さは、僅かの言葉の絶妙な組み合わせで読者の記憶の宝

庫の錠を解き、読者の空想をかき立てかえって写実主義よりも正確な写実を読者に描かせるところであろう。これよりぼくもより簡潔な記載を心掛けよう。

雨の弱まった朝に校庭を見れば、硫黄の煙が音を立てて一隅より上がっている。玄関の床には焼け死んだ羽アリが灰かすのように踏み場もないくらい散らばっている。

十和田湖の岸辺を走ると霧が晴れ遊覧船が現れ、また半島の影に隠れる。やがて波来て騒ぐ。

休屋のみやげもの屋にて買い物をすると、店の婦人に茶菓子をごちそうになった。ひとしきり息子の愚痴話を聞かされ、茶も二杯目。

もくもくと水辺を進む相棒のあとを追うと、雨に濡れた乙女の像が二体。

発荷峠へと登る坂道の入口のトイレ、音を立てて山水が中を流れて気持ちいい。

登りの辛さを紛らわすために蛇行しながらセンターラインの切れ目を縫って登れば、いつしか大高君がすぐ目の前でこいでいる。

103号線を進んでいると、パンク。大湯のバス停まで押して、そこからぼくはバスで十和田南駅へ下りる。下りをバスで行くとは何と悲しい。大高君は先に着いて自転車屋を見つけておいてくれ、そこで中古の太タイヤを割引で購入。これも布部がほころびておりいつバーストするかと不安がつきまとう。駅で立ち食いうどんを食べる。

282号線を進み、341号線に折れ、八幡平を目指す。上に行くほど食料品店がなくなってくるので、早めに夕食のための買い物を済ませる。今宵は最後の晚餐、惜しみなくリッチな材料を選ぶ。店から出ると、雨が降りだした。これから標高1000メートル強の山間地に登ってゆくというのに不安だ。シェフが雨空に向かって苦言を吐いた。

幸い雨は長続きしなかった。しかしきつい行程が続く。341号線を黙々と登っているとクマ牧場があり、このあたりにはツキノワグマが生息していることが思い出された。トコロ温泉で休憩し、そこから八幡平アスピーテラインに入る。温泉旅館がぽつりぽつりとあり、駐車場にすでにテントが一つ張られていた。ぼくらはまだリタイヤするわけにはいかない。

後生掛温泉では京大生のサイクリング・クラブがやって来ていた。檻があり若い熊がその中でストレスをためている。長く頑丈な爪を持っており、これで一かきされると落胆させられることだろう。

後生掛温泉を出てゆっくり登っていると、歩いて下りてくる婦人がいた。ひとつ上の温泉宿、蒸ノ湯（ふけのゆ）温泉に行こうとしたがなかなかたどり着けず、日も暮れかけてきたので不安になり後生掛温泉に引き返しているのだということだった。ぼくらが上に行くのでついてきたそうだったが、ゆっくりとはいえ自転車の速さにはついてこれないと思ったのだろう、あきらめて下っていった。

熊がいつ現れても退治できるように、ぼくはサイドバッグに差したナタの安全留めを解除し、大高君も登山ナイフを腰に付けた。あちこちで湯煙が吹き出していた。夕闇の山道を登って行くと、ようやく蒸ノ湯のバス停にたどりついた。これはバス停兼展望所で屋根があったのでここでテント泊することにした。道路の反対側を下りると大深温泉、こちら側の脇道を行くと蒸ノ湯の温泉旅館に通ずる。

蒸ノ湯の温泉旅館に行く夜道はくねり、ずいぶん下ってゆかねばならなかった。夜中に歩いて訪ねてきたぼくらを見て、宿の番頭がどこに宿をとっているのかと聞くので、上のバス停にテントを張っていると言うと、あきれていた。宿の大きさのわりにはさほどに広くない浴室であった。湯につかりながら飲んだビールはおいしかった。子供連れの人があり、なかでも女の子のほうが騒ぎ、あげくの果てに坊やが小用をしたので、シェフは父親のしつけの悪さに憤慨した。

湯から戻ってぼくらはバス停兼展望台で最後の晚餐の用意をする。ほろ酔い気分のぼくは不手際でテーブルにおいたプリムスのこうこうと輝くランタンを倒してしまい、火屋ガラスを割れた。とたんに暗闇が訪れ、ぼくは落胆した。しばらくするとシェフが太い口ウソクを取り出し真ん中において火をつけた。すると柔らかな明かりが次第に広がり、先ほどまでの調理台がいつのまにか食卓に変身し、シェフのお勧め料理とソムリエの特選ワインとがテーブルを飾っている。食事が始まると、ソムリエはまたいろんな愉快的話をしてくれる。やがてデザートがくると、マエストロによりアンデスの音楽が奏でられ、すっかり寛いだぼくは眠りの馬車の迎えが来るまで星空を屋根にした遥かな宮殿の中でこの優雅な晚餐をこころゆくまで楽しむ。

8月21日

早朝から雨が降っていた。山の天気は変わりやすい。10分刻みで刻々と変化してゆく。出発準備をしていて、雨が降っているので防水服を着ていると雨は止み、それではと防水服を脱いで片づけているとまた降りだし、困ったなあと思っていると止み、さあ出発しようとするともた降りだすという具合だ。刻々と移動する雲の中にいるので、こんなことになるのだ。

八幡平アスピーテラインの登りはまだまだ続く。道の脇や谷間で勢いよく湯煙が吹き出している。雲が移動しているのだろう目の前を薄い空気のシートがゆっくり流れてゆく。石炭を焚きながら登ってゆく蒸気機関車のように、ぼくはポケットからしきりに菓子を取り出してはかじりながら

らピークを目指して登っていった。しかしこのラインの実質的な最高所は意外とあっさりしたところであった。峠の名もない。大高君がそこで待っており、ここから先はもう下りだけだと言う。山頂レストハウスなどのある見返峠はもっと先にありそこまでは確かになだらかな下りだった。

レストハウスのそばに自転車をおいて、八幡平頂上自然研究路を歩いて見返峠に到り、八幡沼、ガマ沼などの火口湖を眺めた。たくさんの人が写真を撮っている。遠景は霧で隠されていたが、その霧が晴れるときに見られる広がりゆく景色は実に美しい。大高君がその瞬間をカメラでおさめたので、ぜひその写真ができれば送ってくれと頼んだ。後日いただいたのを見てみると確かに美しい。しかしあの時の感動は蘇らない。あれは次第に切れてゆく霧の動きにつれ、光が差し込みそこに出現した景色が次第に明るさを増してゆき、しかもその光を自分も同時に受けているという喜びによるものだったのだろう。シェフの父親から借りたという高級一眼レフカメラをもってしてもあの美しさは記録できなかった。シェフは高山植物をも接写していた。

岩手県と秋田県の境がこの見返峠を通っている。ここらぼくらのサイクリングツアーは終点の盛岡市までずっと下りに行くことになる。アスピーテラインの下りで多くの女子大生が自転車で登ってきていた。こちらから登るのは勾配がよりきついので大変だろう。下ってゆくほどに空気が温かくなってゆくのがよくわかる。

盛岡まであと何キロ、という標識が次第に頻度を増して現れるようになってきた。スタジアムに戻ってゆくマラソンランナーのようにぼくらはスパートをかけた。

盛岡市街に入ると、石川啄木新婚の家、県庁の石割り桜などを訪ねた。バスターミナルでシェフは自転車を解体した。そして、わんこそば東家で最後の食事を楽しんだ。しかしぶしつけに蕎麦を碗に放り込んでくる若娘にはシェフも苛立って「いけすかん」と苦言を吐いた。

大高君の乗る長距離バスの時間が迫ってきた。旅は終わった。この旅が、8日前に専務も含めた三人で仙台駅を出発したサイクリング旅行の延長線上にあるものだということがなんだか信じられない。出発したのがもうずいぶん昔のここのように感じられる。あの仙台駅で再会した時の膨らみ気味の大高君は今では精悍な体型を回復していた。

彼は黒いTシャツと半パンツの出で立ちで、着替えとしてはやはり黒いTシャツと半パンツを持参していた。彼は途中のキャンプサイトで、汗や埃まみれになった衣服を洗剤で洗濯して古いのを繰り返して着用し、この着替えはサイクリング道程の終点盛岡までとっておいた。盛岡のバスターミナルで彼は、さまざまな経緯で付着し洗剤でも落ちなくなった汚れにまみれ、さまざまな接触でところどころに穴が開いてよれよれになった黒いTシャツと半パンツを脱ぎ、新品の黒いTシャツと半パンツに初めて着替えた。翌朝大阪でバスを降りるときには、彼のフィアンセが

迎えにきているはずだ。このサイクリング旅行が、自分の体はもちろん衣服もかすりキズ一つ無い安全で気楽なものであったことを彼女に示したかったのだ。ぼくは別れ際に、彼の幸せな結婚を願い、彼の手を握った。長距離バスはターミナルを出ていった。

一人になったぼくは、水筒の代わりに使ったハイサワーのプラスチックボトルを空にし、ごみ箱に捨てた。役に立ったものを捨てるときにはいつも寂寥感が伴う。新幹線に乗るためにJR盛岡駅に向かう途中、今回の比較的難度の高い旅行を全うした褒美に、自分に新しいシューズとスポーツシャツを買ってやった。

車中ではロング缶のビールを飲みながら長旅のさまざまなシーンを満ち足りた気分で回想した。大高君との旅のあとはいつも喜ばしい余韻が残る。

おわり

東北サイクリング紀行(1)へ戻る

p.booklog.jp/book/78697/read

写真(photos):

amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro